

実家の母

まさかこんなことになるとは夢にも思っていなかった。美佳と離婚することになるなんて――。

二人は相性がよくなかったのだろうか？ それとも価値観が違ったのだろうか？ 考えて見てもよく解らない。

結婚前の交際中にはあんなにラブラブだったのに、わずか二年で破局を迎えるなんて想定外だった。相手を間違えたなんて今でも思えない。この人しかいないと思って結婚したのだ。それなのに……。

新婚当時はとても仲が良く、毎日がバラ色の人生だったのだ。それが一年を過ぎたあたりから、美佳は少しずつ変わり始めた。

妙に怒りっぽくなってきたのだ。以前はそんなことはなかったのだが、ちょっとしたことで突っかかってきたり、仕事で遅くなって帰ったりすると口も聞かないで、寝てしまったりと、少々やりづらくなってきた。

とくに経済的なことに関して、かなり不満を抱いているようだった。将来に対しての不安もあるだろう。彼の給料ではとてもやっていけない。そう思っているようだった。

それでもなんとか切り詰めてやっているのは、よく解っていた。自分の思うようにお金が遣えなかったり、欲しいものが買えないという苛立ちがあるようで、彼が外食したいとか、欲しいものがあるとか、そんなわがままを言うと、ブチ切れるのだ。

「そんなお金がどこにあるのよ！ 私だって欲しいもの我慢してるんだから」

その気持ちはよく解った。最初の頃は自分が悪いのだと思って耐えていたのだが、日を追うごとに彼自身もストレスが溜まり、耐えられなくなっていくのだ。お互いに「こんなはずじゃなかった」と思っていたのだ。

瀬野智樹^{せの ともき}はそんな生活に飽き飽きしていた。癒しの場所である我が家が、そうではなくなってきたのだ。いっそのこと愛人でもつくって、その人の家に入り浸りたいと思ったこともあった。

だが、元来口下手な彼に愛人をつくることなど到底できなかった。会社内にも若い子はいるが、どうもそういう雰囲気にはなれないし、自分から誘うということもできなかった。美佳とは本当に奇跡のようだったのだ。彼女とは気楽に何でも話すことができたので、もうこの子しかいないと思ったのが失敗だった。若気の至りといえればそれまでだが、美佳がこんなに変わってしまうとは思ってもみなかった。

そのことで一度、母の桃子^{ももこ}に相談したことがある。桃子はこう言った。

「女はわがままよ。わがままを聞いてくれない男は最低な男ってことになるの。それにお母さん、始めからあの子のことあんまり好きじゃなかったのよ。あなたが結婚したいって言うから反対はしなかったけどね」

桃子はさめざめとした口調で言った。

当時の智樹は絶対に美佳が必要だと思っていた。最高のパートナーだと思っていたのだ。でもこんな風になってしまうと、自分の選択が間違っていたと思わざるを得なかった。

母はこうも言った。

「離婚するの？ 無意味な結婚生活続けてたって時間の無駄になるだけよ。まあ、よく美佳さんと話し合いなさい」

気が重い。そんな話を出せば、またヒステリックになるに決まっている。喧嘩になるのは目に見えていた。でも、このあたりで、一度腹を割って話し合う必要はあると思っていた。

その二日後のことだった。思い切ってその話を美佳に切り出したのだ。夕飯後のことだった。

「智樹、好きな人でもできたの？」

いきなり自分が悪者扱いされて、智樹はカチンときた。

「そんな人できるわけないじゃん」

智樹は肚に溜まっていることを、その場でぶちまけた。そして「離婚したい」ということもはっきりと言ったのだ。

「そんなことで……？」

と彼女は言ったのだ。

自分が散々悩み苦しみ、我慢の限界になっていたことを軽々しく言われたことに無性に腹が立った。

「そんなこと？」

「いきなり離婚って……、修復する気もないんだね。なんとかしようっていう気もないんだ。サイッター」

美佳はそう言って目を逸らした。

「お前が言うか」

「なにそれ、私が悪いの？ 全部私が悪いの？ 自分はなんなのよ。少ない稼ぎで何とかやりくりしてるっていうのに……。私だって欲しいもん我慢したり、友達にお茶に誘われても断ったりしてんのよ！ 智樹そういうことぜんぜん解ってないでしょ？ だから腹も立つし、イライラするのよ」

「俺にどうしろっていうんだよ。給料が少ないのはしょうがないだろ。それで俺に八つ当たりするなら、もう別れた方がいいんじゃないかって言ってるんだよ。もう三か月ぐらいお前の笑顔見てないよ。いつも怒ってばかりでさ。会社でもいろいろあるけど、家にいるときがいちばん疲れるんだよ！」

今はキレるときだと思って言った。どうせ別れるつもりなのだから、何を言ってもいいと

思っていた。修復なんてする気はなかった。妻に言ってはいけないことを言ったかもしれない。それでも構わなかった。

別れ話をしているので、こんな流れになるのは仕方がない。もう何でもいいと思った。自分が悪者になってもいいと思い、智樹は強引に離婚話を進めることにした。このままだと気が狂ってしまいそうで、下手をしたら妻を殺してしまうかもしれないと思った。そこまできたら離婚しかない。それがお互いのためなのだ。

離婚は結婚よりもパワーがいると友人から聞いたことがある。その通りだと思った。

とにかく美佳と別れたいと思った。もう後には引けず、離婚一択しかない。始めから価値観が違っていたのだ。こんな生活はもううんざりだった。もっと楽しい未来を想像していたのだが、そんなに甘いものではなかった。

そのあとが大変だった。美佳の親がしゃしゃり出てきて、なんとか離婚を踏みとどまらせようとしてきた。向こうの親は「世間体が悪いので離婚はやめてほしい」と言ってきた。

だが、すでに智樹の中では決断したことなので、それでも強引に押し進めた。美佳は親の前ではしおらしくして、悲し気に涙を見せて弱い女を演じていた。全部、智樹が悪いという構図になっていたのだ。智樹の自分勝手な言いぐさで、こうなったということになっている。

離婚というのも、すぐにできるものではなかった。智樹はすぐに離婚届に記入して判を押したのだが、美佳はなかなか判を押さなかった。親に止められていたようだった。このままでは埒が明かないと思った智樹は、荷物をまとめて実家に帰ることにしたのだ。そこまですれば諦めて、サインするだろうと思ったのだ。

離婚して実家に戻ることに対して、母の桃子は大賛成だった。この話をしたとき桃子は言った。

「ウチに帰ってくれば？」

桃子は離婚に反対せずに、智樹の気持ちを汲んでくれたのだ。それが何よりもホッとした。もちろん我が子と一緒に暮らしたいという気持ちもあるだろう。だが、彼は誰よりも美佳がそういう存在であって欲しかったのだ。妻の理解がいちばん欲しいと思っていた。

「うーん、それもいいかな？」

彼はそう言って、ほぼ気持ちを固めたのだ。

「またどっかにアパート借りるなんてもったいないわよ」

現状では美佳と二人で賃貸に住んでいたが、離婚すればその場所は引き払うことになる。だが、美佳がいつまでも離婚届を書き渋っているの、業を煮やして智樹はそこを出ることにしたのだ。

当然家賃は美佳が自分で払うことになるのだ。いずれはにっちもさっちもいなくなり、離婚届に判を押すしかなくなるのだ。もしかしたら当面は彼女の親が家賃を払うかもしれないが。